コミュニティーサロン　庄瀬下町 自主消防団

伝統の「ハッピ姿」も粋に

消防ポンプの高いエンジン音が町内に響びき、水しぶきが乾いた道路や屋根瓦をぬらす――。

庄瀬下町の消防団は、市内でもめずらしい自主組織で、主に町内の防火と、火災時の初期消火をねらいに活動しています。

紺地に朱の粋（いき）なハッピ姿は、昔からのいでたちで、若い人たちにもなかなかうけが良いそうです。このハッピを着れるのは、家の跡とりであることが条件で、団員の現役は四十四歳まで。四十五歳になると現役から引退し、その座を跡とりに譲る慣習だそうです。

「魚を焼いても家焼くな！なんて子供のころ、夕方になると先輩に連れられ、大声で火の用心を呼びかけました」と団員の一人は話してくれました。ですから防火意識は子供のころから自然と身についたという団員がほとんどです。

親から子へ何代も受け継がれてきたこの下町消防団。これからも町内、地域に根ざした自主的な活躍を大いに期待したいものです。

ポンプ操作指導

インタビュー

防火の大切さを子供たちに

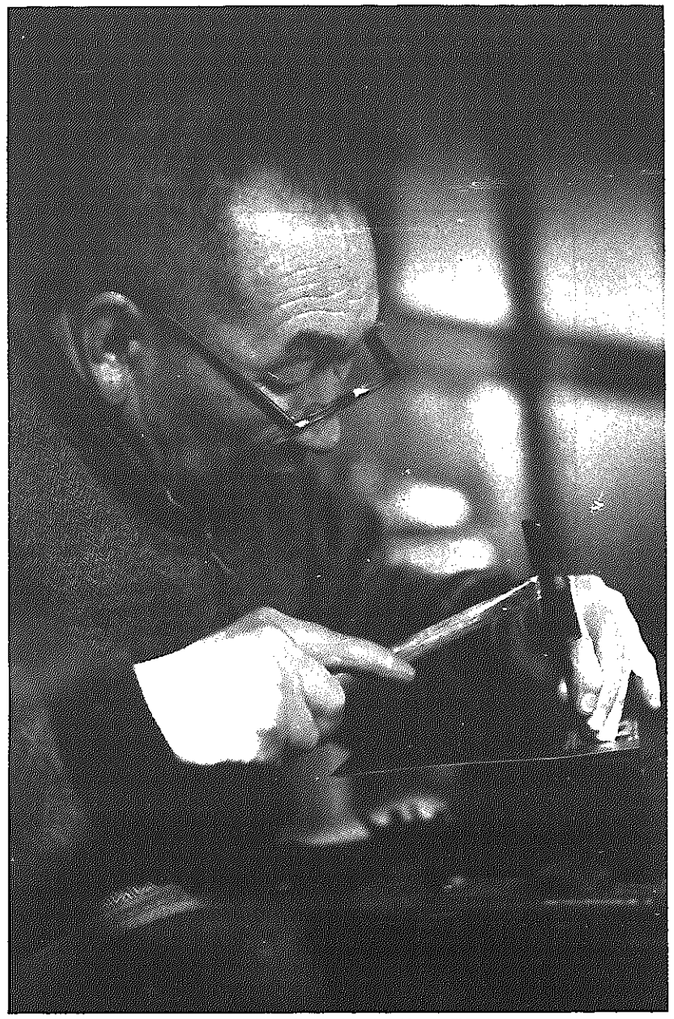
組頭・吉田洋一さん

組頭は町内会長が兼ねるということになっています。今の町内戸数が三十六戸で、現役団員数は二十三人です。半数以上の家から団員が出ているわけです。

この自主消防は、昔の町内青年会が活動の一環として取り組んできたと聞いています。こうした家並のこんだところですから、火災には相当な注意を払わなければならなかったでしょうし、それと若者の親睦をより深めたいという気持もあったと思います。

こうした先輩たちの考え方を、今の私たちも大切にしていきたいこれからの子供たちにも身をもって教えたいわけです。

家庭の安全、町内の安全があってこそ初めて、明るい地域づくりができると思うんです。



手元を見つめる目は鋭い。錺金具とともに生き続ける星野さん

錺（かざり）金具作りひとすじ六十年

星野達一郎さん（73歳・上下諏訪木）

指先に全神経が集中する。一枚の銅板は次第に模様が形作られる

金具を打つ音が響きわたる仕事場

十五歳のとき、技術を身につけたいということからこの世界に…。巻町で四年間修業したあと、上京して錺（かざり）金具師のもとに師事し、修業を積みました。

二十歳のとき、皇居の造営工事に就く機会を得ました。「一年半あまりの錺金具の工事でしたが、おかげで皇居を全部回ることができましたよ。身体検査が厳しくてね…いい思い出です」

昭和五年、帰郷して営業を開始。以来、白根仏壇組合長や、県仏壇金具業組合長などを歴任され、現在は錺金具の名匠『紫山』として、最高技術を極めた数多くの名作を残されています。

こうした長年の功績を讃え、このたび『伝統的工芸品産業功労褒賞』を、市内で初めて受賞。「うれしかったですね。苦労してきたかいがありました。印象に残る作品ですか？しいて上げるならば、長野の善光寺の錺金具かな。でもまだまだこれからです。一日一日が勉強だと思って、体の続く限り作り続けていきますよ」と、語っていました。